●証言による『南京戦史』(10)

46期　畝本正巳

七、海軍第十一戦隊の南京突入

作戦経過の概要

揚子江の水路を啓開し、陸軍と協力して敵首都を攻略すべき任務を有する第十一戦隊(司令官、近藤英次郎少将、旗艦安宅)は、12月11日夕刻、鎮江に突入し、南京に向かう溯航作戦を準備した。

当時、烏龍山付近下流までの北岸は、陸軍の天谷支隊(11D)の一部が進出して残敵を掃蕩中であったが、南岸一帯は敵陣地であり、溯航部隊の進撃を極力阻止せんとする模様であった。

第十一戦隊は12日〇八三〇、前衛部隊(二見ほか五隻)、主力部隊(安宅ほか五隻)の順で進撃を開始し、左岸一帯の敵を制圧しつつ前進し、一二三〇ごろ、烏龍山閉塞線付近に到着し啓開作業を開始した。北岸の劉子口付近から野砲、機銃、小銃の猛射をうけて一時掃海作業を中断したが、一五三〇ごろ、主力部隊が到着し、海軍航空機も烏龍山砲台および北岸陣地を砲爆撃した。

同夜二三〇〇ごろ、諸岡少佐指揮の工作隊が、閉塞船をつなぎとめていたワイヤーを切断し、箱舟やジャンクを取り除き、約三時間後に幅三百メートルの可航水路を啓開した。

――南京突入(12月13日)――

烏龍山砲台の守備兵は13日未明、第十三師団山田支隊の進出及び海軍部隊の砲爆撃により、敗走した模様であり、南京においては陸軍部隊は城内に突入し始めた。

近藤司令官は、急速に閉塞線を突破して南京に進出するに決し、一二〇〇ごろ各隊に進撃を下令した。これより先、保津・勢多は霧の晴れるのを待って一〇三〇抜錨、閉塞線を突破して劉子口陣地からの猛射を反撃しつつ、烏龍山砲台及び水路を偵察し、命によりいったん引き返した。

一三三〇、前衛隊(保津、勢多ほか四隻)、一五一五主力隊(江風、涼風ほか三隻)の順で泊地を発進、単縦陣で閉塞線を突破し、南京に向け進撃した。さらに主力隊の後に第一水雷隊がこれを追った。

江上、江岸は敗走する敵の舟艇、筏で充満していた。各艦はこれに猛攻撃を加え、さらに天河口、硫安工場付近の野砲陣地その他の抵抗を排除しつつ前進し、先頭の保津・勢多は一五四〇、主力隊は一七〇〇、南京に突入した。第一掃海隊は南京到着後、ただちに泊地を掃海し、また浦口桟橋を確保した。陸軍部隊は同日夕刻、南京城を完全に占領した。

――米国砲艦パネー号遭難者の救援――

13日〇九〇〇、長谷川長官は米国東洋艦隊司令長官から、12日一四三〇以降、砲艦パネー号との無線連絡が絶えたむね、通告をうけた。調査の結果、前日第二聯合航空隊の飛行機が、南京上流二六浬付近において中国船と思い撃沈した船が、米国砲艦パネー号及び米国商船であったことが判明した。

長谷川長官は航空部隊に対し、揚子江における艦船の爆撃を禁止するとともに、遭難者救助に全力をあげるため、南京突入直後の保津に「即時、開源碼頭付近で遭難したパネー号の救助に向かえ」と指令した。

「保津」は直ちに下関を出港し、二〇三〇ごろ現地に到着、同地に在泊中の英艦ビー号に先任将校・橋本以行大尉(海兵59期のち少58)を派遣した。同大尉は英艦の内火艇に乗艇して、北岸の和県に至り、夜を徹して同地に避難中のパネー号遭難者の救助、負傷者の収容にあたり、14日朝帰艦した。

――南京突入後の行動――

14日　第十一戦隊は敗残兵の掃蕩、航路の啓開を続行した。「掃四」は蕪湖に進出、二見、熱海は草鞋峡水路を啓開、比良及び「特掃」二隻は鎮江において天谷支隊の渡江作戦に協力、特別作業隊は烏龍山閉塞線の拡大啓開、保津、鵲、安宅、鴻、江風はパネー号遭難地にあって救助作業に従事した。

各艦艇は陸戦隊を揚陸して江岸の敗残兵を掃蕩し、下関の海軍碼頭、中山碼頭一帯を占拠した。

15日　榎、「掃二号」はそれぞれ南京下流及び龍潭水道において残敵掃蕩、保津、鵲は一晩中執拗な敵の狙撃をおかしてパネー号遭難者の救助作業に従事した。〇一〇〇米砲艦オアフ号及び英砲艦レディバード号は遭難者の収容をおわり、鵲は両艦を綱導して下江した。また保津は夕刻、蕪湖に進出した。

16日　南京付近在泊の艦艇は、15日夜から引き続き江上を漂流する残敵を掃蕩した。また二見、勢多は終日、宝塔水道一帯の残敵を掃蕩するとともに、勢多は陸戦隊を揚陸し、硫安工場一帯の敵陣地を占領した。

17日　午後、南京入城式が陸海軍部隊によって行われた。長谷川支那方面艦隊司令長官、大川内上海海軍特別陸戦隊司令官、近藤第十一戦隊司令官は各幕僚を従えて抱江門から入城、中山路に堵列する上海特別陸戦隊の二コ大隊と艦艇陸戦隊の閲兵を行い、式場たる国民政府に向かった。このとき、海軍航空隊と陸軍航空部隊は南京上空で分列式を行い、南京攻略作戦は終結した。

(防衛庁防衛研修所編著、戦史叢書『中国方面海軍作戦』(1)による)

*

▼橋本以行氏の証言(現住所、京都市右京区梅津フケノ町)

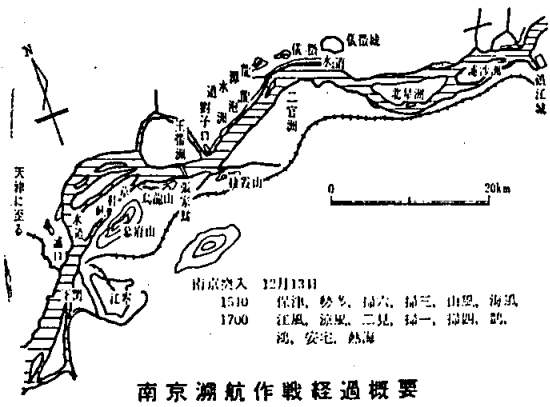
『流れる敵兵をかき分けて』

――下関桟橋に突入――

保津、勢多の二艦は江岸の砲兵陣地を制圧して、(13日)朝もやの消えやらぬ江上を進み、勇躍閉塞線を突破した。真近に迫った烏龍山の山々の重砲も沈黙したままである。すこし遡ると、小舟に乗った敵兵らしい者が江上一面に漕ぎ出して、われ先にと対岸に逃れつつあった。

午後1時に旗艦「安宅」以下が一列単縦陣となって、南京に向かって進撃を開始した。航行序列は保津、勢多、「掃六」、「掃三」、山風、涼風が前衛隊となり、二見、熱海、「掃四」、「掃一」、江風、海風、安宅が主隊となって続き、少し遅れて別個に鵲、鴻、さらにやや離れて「掃二」、「掃五」がこれを追った。各艦艇は一斉に抜錨し、保津は最先頭を切って突進した。

午後1時38分、保津が南京下流の閉塞線を突破した頃には、既に渡江していた小舟の数は減りつつあるように見受けたが、今度は我



南京溯航作戦経過概要
鎮江より南京まで(48浬)

橋用の箱舟や筏が現われた。もう乗る舟がなくなったのであろう。

先頭を進むわが「保津」では主計兵、機関兵まで駆り出し、艦砲、機銃はもちろん、小銃まで持ち出して前後左右に射ちまくった。最初に出会った小舟の群れは、難民のようであったので射ち払わずに進んだが、群れの中の近くの一隻から盛んに手を振る者がおる。双眼鏡で見ると、日本陸軍兵のようなカーキ色の服を着て、戦闘帽を被った姿である。後続の諸艦に信号で「射撃しないように」と注意した。

しかし、陸軍の兵隊が一人や二人、遊難民と一緒に渡江するとは考えられないと気が付いたが、突嗟のことで確認できないまま行き過ぎてしまった。なかなか巧妙な遊難法である。我々の艦に近寄り、手を振り歓声をあげたのは、あるいは我々を中国の艦艇と間違えたのかも知れない。

射ちまくって進むうちに、射距離三百～五百メートルで百発百中であった八糎砲の弾着が、目標から百メートルも近くに弾着しはじめたので調べてみると、目盛板の止め金が緩んでいた。

しばらくして、機銃と八糎砲の残弾少数と伝えてきたので、好目標しか狙わぬこととした。双眼鏡で艦側近くを流れる戸板の上に横たわっている中国兵をみると、顔をシャベルでかくして背後にチェコ機銃を横たえ、死んだようにしている。このように小銃や機銃を大事に携帯していても、正規兵の服装をした者は一人も見当たらない。

このようにして午後3時すぎ、南京城獅子山砲台を遥かに望む崔家山近くまで来た。その時、いずこともなく飛んできた小銃弾で、大西一等水兵が負傷した。左側の背丈より高く芦が生い茂っている草桂洲に、多数の中国兵が見える。芦の中から舟を漕ぎ出し、わが遡航部隊を見て再び芦の中に逃げ込むものもいる。

南京城付近の重砲や烏龍山砲台は、日本軍の猛爆が功を奏したのか、あるいはわが陸軍部隊が占領したのか、今日はその真下を通っても、一発も射ってこない。そして遂に獅子山砲台の真下を通り過ぎて午後3時59分、第十六師団の一コ小隊が、日の丸の旗を掲げて突進してきた中貨桟橋に横付けした。

◇　◇　◇　◇

江上には相変わらず一面に中国兵が乗った浮遊物が流れていたが、弾丸が欠乏して射つことができない。ところがそれを見つけた小隊長は「あれを射って下さい。敵兵ですよ」と叫ぶ。艦長がそれに構わず話をしようとすると、そこらにあったチェコ機銃を拾ってきて、矢庭に射ちはじめた。そして艦長に向かって「あなたたち戦友がやられていないから、そんなに呑気にして居られる。われわれは皆、戦友を失ってきたんですよ」と怒髪天を衝く形相であった。

敵の反撃をうけず、選り好みしながら射ちまくってきた我々は、喰うか喰われるかの血みどろの戦闘を続けてきた陸上部隊は違うものだなあ―と、申し訳ないような気がした。海戦がいつもこのように楽だとは云えないが、敵を真近に見ないので敵愾心が陸戦の者より薄いように思われた。

◇　◇　◇　◇

中貨桟橋に横付けして一歩も陸上にあがらないうちに、どこからともなく砲弾が飛来し、一発二発、近くの陸上や水中に落下し、大音響を立てて炸裂しはじめた。白煙をあげ、今まで見たことのない爆煙である。幕府山砲台の残兵が射って来たものか、味方の砲弾か不明である。これはいけないと、急いで桟橋を離れて沖合に出た。

揚子江の中程に出て上流に進み、下関桟橋沖を経てその上流に投錨した。時に午後4時40分。この辺には敵弾も飛来せず、一同ホッとして一息入れた。

後日判ったのであるが、江岸沿いに進撃した山田旅団が烏龍山砲台を占領したのは、13日午後4時30分頃であり、幕府山砲台を占領したのは14日午前11時であるから、我々が進撃した頃は、未だ占領されていなかったのである。

わが「保津」が中貨桟橋に横付けしている間に、すぐ後に続いた勢多は、我々を追い越して下関桟橋に横付けした。勢多が下関桟橋に近寄った頃には、付近一帯はなお中国兵で埋まっていた。江岸の敵兵は勢多の接近を見て、味方の軍艦が迎えにきたと勘違いして、歓声をあげて迎えたようであったが、やがて艦頭に飜える大軍艦旗を見て、狼狽しながら勢多に向かって小銃を射ってきた。

寺崎艦長は「あれを射て」と足を踏み鳴らして艦橋から叱咤した。艦内には残弾が殆どなく、僅かに残っていた小銃弾をもって、応射しながら横付けし、江岸の敵のチェコ機銃を拾い集めて、江岸の敗敵兵を射ちまくった。

保津がこの沖合にきた頃には、勢多は既に桟橋を離れて沖合に投錨し、下関桟橋には日章旗を掲げた小型戦車が一台到着して万歳を叫んでいた（注、軽装甲車第八中隊であろう）。

この桟橋下流の江岸一帯には、敵兵が黒山のように重なり合っているのが見える。死んでいるのか、動く様子がない。もう渡江する舟もなく、板切れも無くなったのであろう。戦車からは見えないようだから、手旗で「江岸一帯に多数の敵兵あり」と知らせてやった。

揚子江に面した南京の城門は、土嚢をもって厳重に封鎖されていたが、城壁から江岸にかけて、一面に青黄色の軍服の上衣が脱ぎ捨ててあるのが、秋の木葉を散り敷いたように夕陽に照らされていた。

▼**関口鉱造氏の証言**（砲艦勢多・次席大尉、海兵59期、現住所、東京都中野区野方一―四六―一）

――**下関桟橋から南京入城**――

……「南京大虐殺」などという言葉は終戦後、極東軍事裁判で問題になって初めて知りました。「南京江岸における大量処刑」なる事実は、少なくとも当時の海軍、とくに南京市に最も近く碇泊していた勢多では目撃しておりませんし、銃声も聞いておりません。

日記なども焼却したため、記憶を辿って申し述べます。

13日、下関桟頭に突入　当時勢多は第十一戦隊に属し、前衛部隊の一艦として13日午後、敵の敷設機雷を排除しつつ下関碼頭に接近した。碼頭及び江岸には、武装した中国正規兵が蝟集しており、対岸の浦口方面に逃走すべく便船を待っている様子でした。

下関碼頭に勢多が近づきますと、敵は収容にきた味方の軍艦と思ったらしく、銃をあげて歓声をあげておりました。わが方が八糎砲と機銃を射ち出すと、初めて日本軍艦と気付いたらしく、勇敢に小銃を射ってくる者、銃を捨てて大慌てで上流方面に逃走する者、また、わが射撃に江中に転落する者など大混乱を生じました。その光景は今でも眼底に鮮明に残っております。

私が艦橋で見ておりました限り、碼頭や江岸に無秩序に集合していた敵軍は、白旗を掲げたり、両手をあげて降伏の意思を表示する者は皆無でした。

僚艦数隻（保津を含む）は、この間にさらに数キロ上流に進んで碇泊。小舟や筏などで対岸に渡るべく行動中の敵を射撃しておりました。わが勢多は、付近に敵が全く居なくなったのを確認して、碼頭に横付けしました。

13日夕刻と思いますが、陸軍大佐の率いる一団が勢多に来られ、下関碼頭付近に碇泊場司令部を設置する旨を告げられました。これが、南京地区における陸海軍の接触の最初ではないかと思います。

（筆者注・歩兵第三十三聯隊通信班長平井秋雄氏の証言（前出）によると、13日夕刻下関桟橋に碇泊した砲艦勢多艦長・寺崎中佐と連絡しているので、このような陸・海の接触・連絡があったものと思う。）

15日、城内偵察　艦長・寺崎隆治少佐は「南京城内の状況を偵察し、上級司令部に報告の必要あり」と認め、次席士官である私に偵察を命じました。

当時、南京城内ではわが軍占領後「非武装地区」の協定が結ばれ、日・支両軍は撤退したという情報がありましたので、武装護衛兵を伴わず、軍刀一本ブラさげたまま、一人でトコトコと徒歩で城内に向かいました。あとから考えれば、ずいぶん無茶な話でした。

当時の英国は第三国とはいえ反日親支的でしたので、ユニオンジャックの旗のところは敬遠して、星条旗を掲げている建物（鼓楼病院）をのぞいたところ、年輩の米国人（発音で米国人とすぐ判りました）が出てきたので、城内の様子を訊ねました。この人がフィッチ氏であったのでしょう。私は自分の身分・姓名を名乗ったのですが、彼は Fitzroy（フィッロイ）で Amembassy（American Embassy）の者だと言ったように思います。

彼の話を要約すると、

「城内（難民区?）は完全に非武装化され難民が溢れている。しかし、便衣に姿をかえた支那兵が潜入していることは事実である。難民の処理、治安の維持については、米・英など第三国が斡旋して日本軍当局と交渉中である。

支那側の警備軍司令官・唐生智が南京を早期に放棄したため、治安組織が崩壊し、連絡不能で交渉相手がいない。城内の模様はご覧のとおり Confusion（混乱）が続いており、日本軍将校のあなたが、単独でこの地に留まることは極めて危険と思う。乗り物は何で来たのか」と質問する。

私は「下関碼頭から歩いてきた」というと、彼は「それは大変だ、車で送ってあげるから、安全のため一旦、軍艦に帰られたらどうか」と言う。私は、視察の任務は一応達成したものと考え、彼の運転で挹江門付近まで送ってもらいました。彼は、それから先は進みたくないロ振りなので、厚意を謝して下車し、徒歩で帰艦した次第です。

城内の状況　城内（難民区）は女子供でゴッタ返していたが、若い男の姿はあまり見かけませんでした。時折り、窓越しに険悪な眼で注視している男を見かけましたが、どうも便衣兵らしく思われました。

挹江門から下関碼頭に至る道路は、主要道路であるため日本軍の検問所が多数あり、往来する支那人は身体や荷物を厳重に検査されていました。

私は海軍の第一種軍装に陸戦バンドを着用しており、蔣介石バンドを着けた中国軍将校の服装に似ているため、日本陸軍の哨兵に中国軍人と誤認され、危ない場面もありましたが、哨兵本部らしいところから下士官が出て来て、海軍士官の服装を知っていたらしく「大尉殿、まことに失礼しました。お許し下さい」と謝り、一名の護衛兵をつけて下関碼頭の勢多まで送られ、艦長に復命した次第です。

挹江門から碼頭に至る道路の西側には、点々と中国兵の死体を散見したが、それほど多くはありませんでした。

後から考えると、当然護衛兵を連れ通訳を伴い、白地に「大日本海軍」と大書した旗を掲げて入城し、米・英外交機関の責任者に接触して状況を視察すべきであったと思います。フィッチ氏は私の単独行動に驚き、至急帰途につくようアドバイスしたものと思います。

私が記憶していることは以上のとおりで、「虐殺」などという事件は、艦長以下全乗組員とも目撃しておりません。

その後、勢多は間もなく南京を離れ、さらに上流の警備についたのですが、翌13年10月、武漢陥落前に内地転動を命ぜられ、特設砲艦で下江して下関碼頭に上陸しました。

その頃は減水期であり、河川敷にところどころ白骨が見えました。これとても、折り重なっているようなものではなく、艦上からみて、ここに数個、あそこに二、三個といった程度でした。

保津乗組みの橋本以行君は私と海兵同期ですが、同君は『揚子江潮江作戦の私記』をまとめており、その戦史的価値は高いものと思います。

軍艦対陸兵の戦闘の所感　最後に、私が初めて経験した南京碼頭における「軍艦と敵陸兵との戦闘」について、感想を述べます。

元来、揚子江の第十一戦隊の任務は、①対空戦闘、②航路の啓開、掃海、③輸送船の嚮導・護衛、④敵陸上砲台の発見・制圧、⑤航路障碍物の爆破などであります。すなわち、海軍の敵は原則として海軍であり、敵の陸兵ではないのです。

これに反し陸軍は、軍歌にあるように「泥水すすり、草をかみ」Face to Face の白兵戦を繰りかえして、やっと目指す南京城に到達したわけです。

私は12月13日の下関碼頭で初めて、緑色の軍服とドイツ式鉄カブトの中国兵を至近距離に見たのです。敵が散発的に小銃を射ってきたので、初めて戦闘の実感が湧き、砲戦指揮官として碼頭及び江岸の敵兵を射撃しました。

濁流に転落する敵兵を目のあたりに見て、私は憐愍の情すら感じました。私は二年前の昭和9年から翌10年末まで、上海の特別陸戦隊附として勤務しましたが、当時は極めて平和な時代で中国上流家庭とも交際して、漢民族にたいして親愛の念を持っていました。私の対中国観は、どちらかといえば、プロ・チャイナの傾向がありましたので、下関碼頭の光景や挹江門外の中国軍の遺棄死体を見て、「戦争の悲惨さ」をあらためて痛感した次第です。

下関碼頭に横付けした艦内では、下士官兵室で一番乗りの祝宴が開かれていました。私も招待されましたが、昼間の戦闘のショックが忘れられず、ひとり士官室で、内地から持参していたベートーベン交響楽五番「運命」のレコードをかけて、物思いに耽っておりました。

キザと思われるかも知れませんが、当時私は多感な青年でしたから、もしも巷間伝えられるような虐殺の光景を見たとすれば、決して忘れることはなかったでしょう。

人っ子一人歩く者はなく、無人の街・建物は半焼けの家並みであった。自動車から降りて自転車を拾った。少々ダルの工合が悪いため、スピードは出ないが結構乗れる。これで南京市政府や参謀本部、市政会館へはいってみたが、森閑として人影はもちろん全くない。部屋の中は馬糞と藁が散乱している。これは、軍馬を屋外に繋いでおくと日本の渡洋爆撃に遭うため、中に入れたからであろう。

突入した日本陸軍の大野・脇坂部隊などは、それぞれ屋根のある建物を選んで駐屯している様子で、日本の兵士の姿は見当たらない。死せる南京という言葉が適当であった。

私はゆっくりと中山陵、紫金山、玄武湖畔などを写生し、とうとう日が暮れてきた。12月の日は短い。たちまちとっぷり暮れて真っ暗の南京の街、ライトのない自転車で、ほの白く感じる街の道路を下関碼頭に戻らなければならない。昼間戦死した中国兵の死骸を、五、六頭の犬が競って食う様子を見た私は、その犬が、どうも私の後を追ってくるらしいので、死に物狂いで自転車を走らせるがスピードが出ない。

▼住谷盤根氏の回想（第三艦隊従軍画家、安宅乗組）

――南京陥落後の捕虜殺害――

（雑誌『東郷』58年12月号）

上海方面の戦況が有利に進展し、中国軍が南京に向かって退却をはじめた頃、日本海軍の渡洋爆撃によって、首都南京は連日のように大火災を起こしていた。

日本軍は上海と杭州湾の両方面から南京に追撃したが、南京に追いつめた時の中国軍は、そんなに大軍ではなかった。しかし、中山門や光華門・中華門や太平門などで抵抗した最後の中国兵は、小部隊ながら精鋭だったようであった。

私は当時、揚子江の第十一戦隊旗艦安宅に乗組んでいたが、南京が陥落した直後、下関碼頭から新聞記者の自動車に便乗して、興中門の累々たる伏屍を越えて南京市内に入いった。

今度は、陸軍の歩哨に誤って射殺されてはたまらない。われ日本人なることを、姿の見えない歩哨に知らさなければならない。とっさに口に出た当時の流行歌「天皇陛下の為ならば……」を歌いながら歩哨の前を通った。近づいて懐中電灯で私を照らして腕章を調べ「海軍さんですか、――すんでのこと一発放つところでした、あぶないですよ―、注意して行って下さい」というわけだ。

興中門近くに戻ってきた時、列をつくってゾロゾロと不規律に歩いて行く人の群を見た。これは中国民衆の着る服装ばかりで、日本の陸軍の兵士が点々とこの列を守りながら興中門の方へ歩く。私はこの列を追い越して興中門をくぐって下関碼頭に着き、安宅へ戻った。

第十一戦隊司令官近藤英次郎閣下の部屋で司令官と歓談後、士官室に帰った私へ、従兵が来て「参謀室で住谷さんをお呼びです」と伝えた。参謀室を訪ねると、藤原喜代間中佐、白浜少佐らがおられて、ウイスキーと羊羹を勧めて、少々堅くなっている私をやわらげて下さった。

その時「陸軍からの問い合わせの電報があって、捕虜の処分はどうなっているか?」と第三艦隊司令部から、問い合わせがかかってきた。福岡参謀は「未だ判りません。すぐ調べて報告します」と返電して部屋の外へ出て行かれた。私は直ちに福岡参謀の後に従って、士官室に戻った。

士官室ではこの問題を知っていて、若い中尉（名前は忘れた）が、家宝の銘刀を軍刀に仕込んだのを握って「今晩一つ試してみたいのです。未だ一度も使っていないから」と力んで士官室を出て行かれた。夕食がすんで大分たってからである。

私も中尉に従って士官室を出て敕門を降り、下関碼頭を左の方へ行って、江岸の鉄の垣根（手すりの低い柵）のところへ行った。道路の右側に捕虜が五人ずつ縛られて、ずっと遠くまで並んでいるようだが、夜の暗がりでよく見極められない。

陸軍の兵士が、その五人を鉄の垣根のところへ連れ出し、江に面して手すりに向こうむきに並ばせては、後ろから銃剣で突き刺すのである。その様子は、とてもまともには見ていられない。海軍中尉も、この様子を見て「とても後ろから斬りとばすことはできない」とやめてしまった。私が懐中電灯で照らすので「その電灯は離れないと返り血を浴びる」と陸軍兵に言われたので、これを潮時に中尉と二人で安宅に帰った。

夕方暗いなかを陸軍兵に連れられてきた中国人捕虜の数は約千人足らずと見た。他にも捕虜があったのではないかとも考えたが、ともかく何万という捕虜は、南京に関する限り、あるはずがないことは確実である。

その翌日、南京に全く市民の人影一人いないことが不思議であったので、例の自転車で市内を少々めぐってみると、市の片隅に「立入禁止避難民区域」と、横幕が通りに張り出してある。その中は言葉に絶する混雑をきわめた避難民の町であった。

二十万虐殺とかいう説に黙しきれず、正直に事実を記した次第である。

（注）

捕虜殺害の目撃日時が不明であるが、入城式前に城内の便衣兵、敗残兵を徹底的に掃蕩しているので、17日以前と推測される。

佐々木元勝氏（前出）も16日夜、俘虜約二千を下関で銃殺という話」を記録している。

▼泰山弘道氏の従軍日誌（中支派遣第三艦隊司令部・海軍軍医大佐）

（注）　海軍軍医大佐泰山弘道氏は、12月17日の南京入城式に参列するため、長谷川長官に従って、水上飛行艇佐第三号に搭乗して16日午後0時半頃、南京の下関に飛び、砲艦安宅で休憩。午後2時10分より岩本機関長、加藤主計長とともに、自動車で南京市内の新戦場を視察した。その目撃記を次のように述べている。

＊

12月16日

下関の桟橋を出づるや、揚子江の汀には敵が退却に際し捨てたる、褐色にして打出の小槌の形をなせる手榴弾、鉄兜が無数に散乱せるあり。下関碼頭より一直線の広き舗装道路を走るに、路面には小銃の弾丸散乱して、恰も真鍮の砂を敷きたるが如し。路傍の草原には、生々しき支那兵の死体の散乱するあり。

やがて揚江門に到るや、高く聳ゆる石門のアーチ形なる通路は、高さの約三分の一は土に埋れて、これを潜るには下関側より坂をなす。徐ろに進む自動車は、空気を充満せるゴム袋の上に乗れるが如く、緩やかなる衝動を感じつつ軌るあり。これ、車が無数の敵屍体の埋れる上に乗れるなりと、さもあるべし。土の層薄きところを進むに、忽ちにして土の中より肉片の沁み出づるあり、凄惨の状筆紙につくしがたし。

漸く門を潜り抜けて南京側に出づれば、敵の死屍累々たるが、黒焦となり、鉄兜も銃剣も黒く燃りて、鉄条網に用ひたりし針金と絡まり、門柱の焼け落ちたる木片と相重なり、堆く積める土嚢も黒く焼けて、その混乱と酸鼻の景は譬へん方なし。

門の右手なる小丘には、『中国与日本誓不両立』の文字を刻みありて、蔣介石の抗日宣伝の跡を示し、市内に近づくに従ひ、敵の遺棄せる藍色木綿の便衣は、あたかも襤褸の如く道路を埋め、処々にカーキ色軍服いかめしく、革の脚絆を穿ち、手足の関節強直して仰臥せる敵将校の屍体をも見る。

市内に入れば、鉄路院、交通院の警ては華麗に近代支那建築の粋を誇りたる官衙は、或は黒焦となり、或は崩れて見る影もなく、道には人力車、自動車の黒く燃りたる残骸数知れず捨てられ、市内目抜きの場所も防空壕を築くために、路面を掘りかへし、昔栄華の面影見るべくもあらず。

今日の見学をこれに止め、午後4時45分安宅に帰艦す。

夜に入れば、満月に近き冬の月光は江上を照らし、浦口および市内各所の火災による紅蓮の焔は、天をこがすばかりにて、陰惨の気鬼哭啾々たり。時々、静寂を破る機銃の音は、抗日の執念抜くべからず幾千の敵兵が、魂消えゆく音なり。凄絶惰絶の光景、これ新戦場の夜半なり。

12月17日

朝まだきに起きて、加藤主計大佐とともに下関の碼頭に立つに、やがて真紅の朝暾は静かに東天に昇る。加藤主計大佐に促され、朝露濡きたる新戦場を、揚子江の汀に沿ひて舗装道路を下るに、下関一帯二、三町の間には、折れ焼れたる小銃、機銃が枯木の枝の落ちたるが如くに散り敷き、小銃弾、機銃弾、拳銃弾は砂利の如く路面を埋め、迫撃砲弾、手榴弾も数限りなく捨てられ、飯盒、水筒、胴乱、銃剣、鉄兜等の随身兵器も撒き散らされ、狼藉云はん方なし。

剣帯、脚絆等の革具類、軍衣・毛布より綿襖の便衣までが、塵塚の如く堆く積まれ、その間に或は天を仰ぎ、或は地に臥して魂消えし敵兵の累々たる屍が、四肢を空中に伸せる敵軍馬の屍骸と入り乱れ、犬の屍すら混りて、吹き来る風も腥く塞息せんばかりなり。満目これ死の静寂を昼し、鬼哭啾々、敗敵滅の凄惨なる光景を展開す。

揚子江の波打際に進めば、岸辺に築ける石垣の陰より、便衣を着けたる二人の敗残兵現はれ、我等に向ひ手布を振り、何事かを合図するものの如し。少しく隔りて、我陸軍兵士のカーキ色軍服の肩動くも見ゆ。余と加藤主計長は過ぎ行かんとするに、かの一人は我等を追ひ来りて、地に伏して救を乞ふ如きも、既に頭部には傷を負ひ、流れし血潮は顔面に凝着して褐色の漆を塗りたるが如し。

我等は先を急ぎつつあれば「彼に碼頭の方へ行き関係官に救を乞ふやう」手真似で示したるも、彼は尚紙片を拾ひ来りて、木炭をもって何事か書き、筆談せんとするものの如く執拗に僕を乞ふ。折しも、騎銃を肩にせる後備兵と見ゆる我陸軍の兵が帰り来れるをもって、彼の隊長にこの支那兵を引渡すべく告げて、余と加藤主計長は歩を進めながら後を顧みると、我兵は詮方なしとや思ひけん、敵兵を後に向かしめたりと見るや、銃口を支那兵

の背部に当てて引金を引く。彼は悲しき一声を発して、銃声とともに斃れたり。余等は、敵ながら憐愍の情に堪へざりしが、彼等も何れ来るべき運命に従ひたるまでにて、詮かたなかりき。この光景を目撃せる我等は、彼の冥福を祈りつつ引返して艦に帰る。

午前9時より岩本機関大佐、加藤主計大佐とともに自動車にて戦跡を見学す。敵八十師司令部、交通部、鉄路部の大厦高楼の焼け崩れたる址にありし日の美観を偲びつつ中華門を潜る。この門は花崗岩をもって造りたる堅牢無比の城門なるに、忠勇無双の我陸軍は城壁の一角に、我砲弾により破壊口をつくり、これを足場にして城壁によじ登り、これを乗り越え、敵殲滅に成功したるものなり。

やがて大校飛行場に着く。ここは我が海の荒鷲が死を決して爆撃を行ひし処にして、幾多戦士が花と散りしを思へば、感慨無量なり。飛行場には我が爆撃により、噴火口の如き大孔を穿たれ、格納庫は天井を貫かれ、庫内にはソ聯機、米国機等の精鋭なる飛行機の残骸あり。基地部隊の兵営も、多くは破壊せられたるが、我海軍航空隊は既にこれを占拠し、基地の設営を行ひつつあり。午前11時帰艦す。(紀念式典の模様省略)

此処に式は全く終りて下関碼頭の安宅に帰る。時に午後3時半なり。少憩の後、大河内上海特別陸戦隊司令官とともに、余が今朝、中途より引返したる下関下流の江汀を視察するに、波打際には無数の敵屍が黒焦げとなり、或は水に浮び、或は石垣に倚りて相重なれるものあり、修羅の巷の惨状名状すべからず。道を返して上流なる堤防の内側を窺ふに、日本刀の切れ味を喫したる敵の死体六、七十あり。南京市街戦が如何に激しかりしかを思はしむ。

夕食後、加藤主計大佐とともに支那税関たりし臨時港務部の応接室に宿泊することとなる。寝台はなけれど安楽椅子に毛布を敷きて、今夜は昔思ひ出のランプの灯にて語る。窓の外には月の光青し。時々、静寂を破りて機銃の音聞こゆ。

12月18日

朝、微雨蕭々として至り寒さも加はりたり。暫くして雨は霽れたれども、寒風吹き荒び、南京攻略の陣歿英霊を祀るに相応はしき日和となる。

朝食後、大河内陸戦隊司令官、岩本機関長、加藤主計長とともに、自動車にて南京附近新戦場の見学に赴く。まづ獅子林の麓で車を下りて、砲台に差しかかるに、ここかしこに敵の遺棄死体あり。冬枯の枝を交ゆる老樹が茂る山道を縫ひて、丘の頂に達せば、遠くは南京市街、近くは下関の揚子江を瞰下し、何れの方向より攻め寄せる敵に対しても、射撃し得る絶好の防禦地点たり。

丘の上なる砲台には、或は隠見式なる巨砲を据え、或は新鋭なる高射砲が空を高く指さすあり。各砲何れも破壊せられることなく我軍の手に帰し、掩蔽壕の中には無数の弾薬が排列せられたる儘にて、我に鹵獲せられたるあり。砲台の防備堅固にして、巧なる迷彩を施し、築城の妙驚嘆に値するものあり。

山を下り麓なる兵営を巡るに、屋外には敵の遺棄死体散在す。室内には支那兵の兵舎としては珍らしくも清潔に片づけあるを見る。それより市街区域に入れば、中山北路の廃墟となれるに反し、右手の住宅街は破壊を免れ、⊕の印を有する旗を掲ぐるあり。

これ避難民区域にして、我軍が特にこれを設置し、無辜の民をして安住せしめ、皇軍の仁慈に浴せしむる所なり。されど尚は帰り来れる人民は少く、外国人及これが使用人たる支那人が住むのみにて寂莫たり。

中山門より城外に出で、坦々たる舗装美しき陵墓道路を走りて中山公園に到る。林の中なる四通八達の自動車道路には、棉服を纏ひ胴籃をつけたる敵の遺棄死体散在し、この辺においても追撃戦が行はれたるを思はしむ。

やがて中山陵に着き、車を降りて雲表に聳ゆる石門を入り、更に宏壮なる楼門を入るに、両側の覇室には敵兵が最後まで籠城したるものの如く、竹籠に盛れる乾餃、輪切大根の蒸干等の貯蔵食糧、飲料水用の水桶、褥とせし藁束等が散乱して、狼藉たとへん方なし。

敵の文化を尊重せらるる松井方面軍司令官が、南京突入に際し全軍に布告を発し、中山陵及び明孝陵を陵辱すべからずと、これを保護せられたることや。我兵はこれに近づかざりしならんとも、敵は此処に拠りて我に抵抗したれば、砲弾を見舞ふも止むを得ざりしならんか。殿堂の前なる大理石の大香炉は、砲弾に砕かれて原形をとどめず、室内に入るや、大広間には敵の要人が家族とともに、わが空爆の難を避けたるものの如く、一面に絨緞を敷き、火鉢、スートケース、婦人の化粧函等の手廻品さへ散乱す。孫文の眠れる遺骸安置の室は、我軍の手により保護せられ、堅く鍵を鎖して入るべからず。広間の両側の経蔵には一切経を蔵せるが、今しも火を発したることとて、陸軍の将校来り、扉を開きて消火を命じつつあり。

鶏鳴寺の前を経て、明孝陵の門前を過ぐるに、かの石人石獣は破壊せられず残れり。午後慰霊祭に参列することとて、車を急がせて「安宅」に帰る。(慰霊祭の模様省略)

12月19日、快晴寒さ烈し

午前9時抜錨。江を下る。南京は江上より眺たるに、今は全く死の街と化す。聞くならく。最後まで南京を守りし支那兵は、その数約十万にして、その中約八万人は剿滅せられ、江を渡り浦口に逃げのびたる者約二万人あり。下関に追ひつめられ、武器を捨てて身一つとなり、筏に乗って逃げんとする敵を、第十一戦隊の砲艦により撃滅したるもの約一万に達せりと云ふ。

八、入城式と合同慰霊祭

12月17日、陸軍部隊は中山門より、海軍部隊は下関より入城式を行い、翌18日は城内飛行場において、陸海軍合同慰霊祭が敵蘭に執行された。松井大将は、雪がチラつく寒い日の午後、皇后陛下御下賜の「首捲き」をまとい、合同慰霊祭に臨んだが、慰霊祭終了後、将校たちに次のように訓戒したという。

「おまえたちは、せっかく皇威を輝かしたのに、一部の兵の暴行によって、一挙に皇威を墜してしまった。何たることをして呉れたのか。皇軍として、あるまじきことではないか。おまえたちは、今日以後は、あくまで軍規を厳正に、絶対に無辜の民を虐げてはならぬ。それが、また戦病歿者への供養となるであろう。」(松本重治氏回想)

この涙の訓戒は、入城時に大虐殺を行なったがゆえであると、推論するものがある。

松井大将の弁護記録(東京裁判の弁護人・伊藤清氏)や松井大将の陣中日記(田中正明氏発表)および当時の参戦者の証言などにより、その真相を考察してみたい。

*

▼松井大将の陣中日誌抄

大将は12月18日の合同慰霊祭執行にあたり、中国軍将兵の霊をも弔う日中合同の慰霊祭を主張した。これは大将が多年にわたり抱懐しつづけてきた大アジア主義精神の表われであったが、ついに実現できなかった。

この朝、憲兵隊長から「軍紀・風紀の紊乱に関する若干の不祥事件」について報告をうけた大将は、各軍、師団の参謀長と面接し、軍参謀をして詳細な指示及び打合わせを行わしめ、大将は一同に次の点を訓諭した。

1、軍紀風紀の振粛
2、支那人軽侮思想の排除
3、国際関係を重視し、外国の利権尊重

そして、午後の慰霊祭に臨んで「涙の訓戒」を行ったのである。この時までは憲兵隊長が「軍紀・風紀の紊乱による若干の不祥事件」を報告したのみであり、巷間伝えられるような「虐殺事件」について大将は報告を受けていない。

翌19日、20日は幕僚数名をしたがえて市内を巡視し、次のように日記に誌している。

「城内数ケ所に尚兵火のあがるを見るも、さしたるものにあらず。概して城内は兵火を免れ、市民も既に帰来せるを見る。安堵の色深し。」

「大使館に到り、新着の領事館員等と会見し、状況を聞く。」

「朝10時発、挹江門付近から下関にかけて視察す。この付近、尚狼藉の跡のままにて、屍体などそのままに遺棄せられ、今後の整理を要するも、一般の家屋等の被害は多からず。人民も既に多少宛帰来せるを見る。」

大将は翌21日午前10時半、水雷艇に便乗して上海の軍司令部に帰り、杭州方面の作戦指揮をとったが、26、27日頃、大将は「南京における日本軍の不法行為の噂」を聞き、上海派遣軍参謀長に対し、厳しい訓令を発した。

そして、翌年内地帰還の大命を拝したので2月6日、再び南京を訪れて城内外を視察し中国側の自治委員と会談し、南京の治安が回復し、宜撫が順調に進捗中の状況を確認したのち内地に帰還し、2月26日、天皇に拝謁して軍状を復命した。

▼南京虐殺・暴行の証言に対する抗議　松井石根

「南京は支那の首都なり。その攻略戦は、自然、官民の許多の犠牲を来たすべく、なお南京には孫中山陵、明孝陵その他、城内外の文化的跡等の損害を招くことあるべきをおもんばかり、各軍に令して、先ず南京城外においてその隊伍を整え、正々堂々、秩序ある入城を行わしめんと欲し、それぞれ懇切なる諭示とこれら史跡を明記せる地図を与え注意を喚起せり。また、南京を守備せし敵軍（唐生智）に対しては、勧告文を撒布し、つとめて平和的手段により、南京攻略の目的を達せんことを欲したり。

然るに敵軍は態度強硬にして、これに応ぜず、飽くまで南京城の防衛を行いたるをもって、遂に南京城内外において相当熾烈なる戦闘を惹起せり。戦禍の及ぶところ甚大に至れるは遺憾の至りなり。なお敗走せる支那軍が、武器を捨てて所謂「便衣隊」となり、執拗なる抵抗を試みるもの尠からざりしため、我軍は軍民の区別を明かにすること難く、自然一般良民に累を及びしこと尠からざりしを認む。

上海付近作戦の経過に鑑み、南京攻略戦開始にあたり、我軍の軍紀・風紀を厳粛ならしめんため、各部隊に対して再三の留意を促せしこと前述の如し。然るに図らざりき。我軍の南京入城にあたり、幾多わが軍の暴行・掠奪事件を惹起し、皇軍の威徳を傷つくこと尠からざるに至れり。

かくの如き不祥事は、予をはじめ各部隊長の監督至らざりし責を免る能わず。よって予は、南京入城の翌日、特に部下将校全員を集めて厳にこれを訓戒して、善後の措置を要求し、犯罪者に対しては、厳格なる処断の法をとるべき旨を厳命せり。

然れども、戦闘の混雑惹起せるこれらの不祥事件を、悉く充分に処断し能わざりしは己むを得ざりしことなり。

ちなみに、本件に関し各部隊の将兵中軍法会議の処断をうけしもの、将校以下数十名に達せり。」

「また、我軍の南京入城直後における掠奪行為に対しては、特に厳重なる調査を行い、つとめてこれを賠償返還せしむるの方途を講じたり。特に英・米・仏その他列国官民に対する賠償に関しては、わが外交官懇を介してつとめて友誼的に本件の善処をはかりたり。

しかし、戦場内にある列国人の財産及び利権の若干が、自然に戦禍の累をうけたることは、己むなき次第と云わざるを得ず。」

「なお終戦後、暫くして、南京において一般人、俘虜、婦女子等に対し、組織的な大規模の虐殺・暴行事件がありたるやに、米国内で放送しありとの情報を聞き、予は驚き、旧部下をして調査せしめたるも、左様な噂は全く虚妄にして、予の在任中はもとより、帰還後、終戦に至るまで、かくのごとき報告及び情報に接せず、上海における列国新聞通信員との覆次にわたる会見においても、これを耳にせず、全くの誣妄なることを付言す。」

▼涙の訓戒と大アジア精神（筆者）

松井大将の「涙の訓戒」は、参戦将兵に強烈な印象を与えた。だが、若干の軍紀紊乱事件を聞いただけで、なぜ、あのような「涙の訓戒」となったのであろうか。

大虐殺論者の推論を読んで私も素朴な疑問を抱いたのだが、このたび、松井大将の「対支那観・興亜運動に関する信念と実行」を知るに及んで、その疑問は氷解した。

松井大将の対支那観と興亜運動に関する信念と実行（昭和20年12月誌）

「予は支那事変当初といわず、陸軍在職約四十年間、一日として支那との親善提携、興亜の協力のことを忘れたることはない。

予大命を拝し、自から兵力をもって支那軍を懲懲しつつある間といえども、常に支那官民を愛撫し、これを把握することに全力を注ぎたり。

南京占領直後、上海に臨時政府の設立を企図するとともに、他面、人を香港に遣して、当時香港にありし宋子文その他有力なる支那人と連絡せしめ、蔣介石政権との和平交渉の成立に努力せり。

不幸にして事遂に成らず、支那事変は愈々、遂に漢口及び長沙方面にまで拡大し、遂に大東亜戦争まで惹起するに至れるは、まことに遺憾の極みなり。

予は敗戦後の今日においても、なお支那及び支那人に対する愛着の情は依然として変らず、一日も早く日支両国が、われら多年の理想を実現して、真に東洋百年の平和と幸福のために、相提携するに至らんことを冀ひてやまず。この興亜の念願成就せんか。予の老軀の如きは、一身を犠牲にして何ら惜しむところなし。

ひたすら、予の信仰する興亜観世音の神通力により、日支両国衆生を慰親平等に受持し、速かに東洋清浄光を発揮して東亜は勿論、全世界の永久平和を具現せんことを祈念す。」

事変当時、私たち第一線将兵は、松井大将の再三にわたる訓示に対して、これ程までには深い理解を持っていなかった。

このたび、大将の弁護記録、陣中日誌、さらには伊豆山興亜観音像建立の経緯を知るに及び、顧みて慚愧の念に堪えない。

〈未完〉

門外不出の岡村日記を基に描く動乱と戦争の秘史！
支那派遣軍総司令官
岡村寧次大将
支那派遣軍参謀
船木繁著
激動する大正昭和の日中関係史・日本陸軍史のキイ・パースン岡村寧次。秘められていた岡村日記を基に、帝国日本が運命を賭した時代の深層に迫る力作。書き下し一〇七〇枚！
●陸軍中将辰巳栄一氏推薦——戦前戦後を通じて岡村将軍の果した偉大な業績は、本書によって余すところなく解明されており、日本陸軍史の研究に貴重な役割を果す文献である。
A5判・三六〇頁
●定価3800円
好評発売中!!
東京都渋谷区千駄谷2-32-2　河出書房新社　☎03-404-1201　振替口座東京0-10802